

水土文化部会、その五年間の軌跡と内省
"SUIDO" Culture studies (Culture of Land and Water), 2002-2007

山下裕作
YAMASHITA Yusaku

1. はじめに

水土文化研究部会も設立から五年の歳月を経た。一度ここで一区切りつけて、この五年間の軌跡を回顧し、これから先の展望について考えてみようというのが本発表の目的である。筆者にはいささか荷の重い仕事ではあるが、常に大局を見渡す鳥のような視点も大事な一方で、下から見上げる虫けらのまなざしからも、何か大切な提案が出来るかも知れない。そうしたささやかな自負をもって少々のお時間をいただき報告させていただく。

2. 活動 - 研究会・企画セッション・講座 -

水土文化研究部会の活動は、主に研究会の実施と、農業農村工学会（農業土木学会）講演会での企画セッションの実施を主とし、2006年3月から2007年2月にかけて学会誌に講座を掲載した。これまでの研究会・企画セッション活動に関しては右表をご覧ください。これまで8つのテーマで、22の研究報告を実践してきた。また講座は12のテーマ11人の執筆者により構成された。詳細については学会誌 74-3 ~ 75-2 にある。

3. 5年間の内省

この五年間の活動は、水土文化研究という新しい領域に目鼻を付けるという意味で非常に有意義であった。表にあるとおり、農業土木学はもちろん、歴史学・民俗学・文化人類学・考古学・歴史地理学・社会学の人文諸分野から、第一線で調査研究を実践している講師陣をお招きした。ここで行われた多様な報告を整理することは非常に困難である。混乱と言っても良いかも知れない。しかし、この混乱とも見なされる状況は、むしろ水土文化研究がこれから発展する肥えた土をもたらしている。しかし一方で、大いに反省すべき点もある。これら諸活動の運営が、5年もの長きにわたり、限られたメンバーで企画運営されてきたことである。表を見ていただければわかるが、部会幹事会の限られたメンバーの名前が頻出している。この問題は、特に部会事務局を担ってきた報告者（山下）に責任がある。より広い活動を行うため特段の努力を払ってきたとは言えないからだ。しかし、一方にはこの後予定されている山本・後藤報告にもあるような、農業土木プロパーたちの「人ごと」感にも問題があるように思う。報告者は元々人文（歴史・民俗）が専門であり、農業土木にあっては新参者である。そのような者に、農業土木の歴史でもある水土文化研究を任せてはいけないのである。

4. 歴史の役割

歴史には二種類ある。一つは歴史学者による歴史。これは厳密な歴史哲学（理論）のもとと学問（科学）として行われる歴史である。今一つは、人間活動の様々な領域にて独自に編まれる歴史である。この歴史はその人間活動の正当性を根拠付け、その領域に強固な背骨を与える。農業農村工学（農業土木学）は無論歴史学ではない。だからこそ学を担う当業者によって背骨になる歴史を編まなければならない。しかし、水土文化研究に関する講座を学会誌に連載した際、「何の役に立つのか」と問われたと聞く。役に立つか立たないか、短視眼的なことで計れるものではない。これまでこの学問領域が「如何に役立ってきたか」、そしてこの先、いかなる発展的継続であるイノベーションを旨とし、「役立っていく」のか、それは当事者たちによる歴史認識がなければ出来るものではない。またこの領域において歴史を志す者も、そんな無邪気な指摘に戸惑うことはない。歴史は常に闘いなのである。フランス アナール 学派の創始者であるリュシアン・フェーブルの言葉を借りれば、「進歩」の名において称揚された「科学」の応用、つまり「技術」は今や人間に奉仕することをやめ、人間を服従させる。「科学」の人間の価値を保持することが必要なのである。その手段こそ、生活し活動する人間として歴史を編むことである。その歴史

をもって現在を俯瞰し、将来を展望することなのである。歴史とは、変質した「科学」「技術」に限らず、当事者による歴史認識は人間をあらゆる抑圧的構造から自由にする初歩的な手段である。

5. 歴史とアイデンティティ

農学を主とする職場に身を置いて、現在に至るまで12年。強く感じ続けていることがある。それはアイデンティティの混乱である。今、胸を張って「私は農学である」と、なんのてらいもなく自己規定する農学者は少ないのではないか。農業や農村の振興に関しても、著名な脳学者や政治学者の発言を唯々諾々と承っているように見えてならない。農業・農村のプロパーは農学者(と民俗学者)である。「寛大さを口実に抽象的で生彩を欠いた折衷主義に溺れ」(フェーブル)てはならない。この学問は強いアイデンティティを持った強い主体として事に当たらねばならない。そのために何より必要なこと、それこそ当事者として自己の歴史を編むことに他ならない。水土文化研究はこれからの農業農村工学会において最も重要な研究の一つである。

名称	第二回研究会	第五回研究会	第二回企画セッション
日時	2005.3.19	2008.2.28	2006.8.9
場所	農業工学研究所	虎ノ門パストラル	宇都宮大学
テーマ	水利遺構の再発見と利活用	水土・持続のテクノロジー	様々な水土の知 中国辺境地区農村に見る伝統と近代
コーディネータ	山下裕作(農業工学研究所)	松本精一((財)建設物価調査会)	山下裕作(農村工学研究所)
報告者	原山昭彦(近畿農政局土地改良技術事務所)	海老沢衷(早稲田大学教授)	梅崎昌裕(東京大学医学系研究科)
報告テーマ	東海地方における歴史的な水利遺構の成立と存続条件	バリ島の稲作文化と水利システム	海南島の2村落における生業の転換:政策,換金作物,観光開発の影響
報告者	浪平 篤(農業工学研究所)	広田純二(岩手大学教授)	西谷大(国立歴史民俗博物館)
報告テーマ	流れのシミュレーションによる水利遺構の評価 -鼻ぐり井手を事例として-	骨寺遺跡保存と基盤整備との関係	生業システムから見た水田利用の多様性 -雲南国境地帯の棚田を事例として-
報告者	重岡 徹(農村環境整備センタ)	松本精一((財)建設物価調査会)	
報告テーマ	水車はなぜ消えたのか? -佐賀県K町N地区の「美しいむらづくり」から-	一の井遺跡の変遷と現況の維持管理	
名称	第三回研究会		第三回企画セッション
日時	2006.2.24		2007.8.30
場所	虎ノ門パストラル		島根大学
テーマ	先人たちの 水土の知 -もの・ひと・こころ-		文化的景観の諸相 歴史、心意、そして伝承
コーディネータ	広瀬伸(国土交通省道路局)		栗田英治(農村工学研究所)
報告者	松本精一(農業工学研究所)		船杉力修(島根大学法文学部)
報告テーマ	水土の知 とは何か -技術史の視点から-		歴史的な文化遺産の景観復原 -島根県を事例として-
報告者	小川直之(國學院大學文学部)		山下裕作(農村工学研究所)
報告テーマ	水土のひと・こころ		伝承という実践 -記憶の喚起による心意の再生と景観保全-
報告者	金子照美((株)オルタナティブコミュニケーションズ)		
報告テーマ	水土の知 はおもしろい		

コーディネーター・報告者の所属は当時のもの。

表 水土文化研究部会研究会・企画セッション一覧

- [参考文献] リュシアン・フェーブル著 長谷川輝夫訳, 1995, 歴史のための闘い, 平凡社ライブラリー
 広瀬伸, 2007, 水土文化への誘い(その12) - 水土文化の将来展望 -, 農土誌 73-2, pp.56-60